

3年『私』

——自ら問いを立て、意見交流活動を通じ文学を読み深める——

○単元・教材の目標とポイント

【単元・教材の目標】

- ・短編小説を読み、作品や表現の特色に気づくことから、文学作品を読み深める観点を定めている。
〔知識及び技能〕(1)ウ
- ・仲間との交流や協働的活動の実践をとおして作品を吟味し、自らのより深い作品解釈に役立っている。
〔思考力、判断力、表現力等〕C読むこと(1)エ
- ・自分の定めた観点から作品を吟味、追求した成果を評価して、文章に表現している。
〔思考力、判断力、表現力等〕B書くこと(1)イ

【単元・教材のポイント】

本単元は、学習者が自ら立てた「問い」をもとに、仲間との意見交流を通じて生徒それぞれが自分の「答え」に迫っていくことを目指している。これを実現するために、読者としての個を尊重しつつ、教室が個の交流の場として機能し、その交流を通じて個の読みが深まるような学習活動を工夫する。こうした個と協働のそれぞれが機能する学習活動を通じて、生徒一人一人が文学の読者としての成長を遂げること。以上の課題意識に立って以下のような学習活動を構想した。

情報システムをめぐる現代的な様相に題材をとった短編小説を読み、初読後の疑問を出発点とし、グループ活動での話し合いを通じて自己の疑問を追究していく。教師に導かれない疑問の追究過程を「楽しんで」行うことにより、文学作品を読み解く「面白さ」を実感し、生徒の日常の読書活動へと還元されることを主に狙う。同時に、高度に情報化された現代社会に存在する個人、すなわち「私」の存在のあり方について、学習者の意識が喚起される授業となるよう留意する。

『私』は、特段難しい言葉づかいがあつたりするわけでもなく、描かれている場面もごく日常的なものである。だが、生徒の読後感には、おそらく漠然としたものだろう。日常的でありながら奇妙に現実感に乏しい場面が淡々と描かれ、一方、読者としてはきわめて現実的な何かを突きつけられる作品である。その意味では、単元で企図する「学習者が『問い』を立てる」ことに適した作品である。漠然とした読後感から必然的に生まれてくる「問い」。学習者が個人的な読者としてどんな窓を開き、どのような問題意識をもってこの作品を見ようとするか。実践にあたり、教師が丁寧に見極めなくてはならない点である。多様な「問い」が生まれることは、本学習単元の端緒として有意である。そして、漠然から出発して「おもしろいな」という実感にまで至れるのかどうか、大きな課題となる。

〈学び方のポイント〉

第一次の2時間は、学習者各自が今後の授業の中で追究していきたい疑問を定める過程。音読による通読や語句の意味調べといった準備を経て、「今後の授業で自分が追究していきたい疑問」として「……か。」で終わる一文にまとめさせる。第二次の2時間は、グループ活動を中心とした作品読解の過程。学習者が主体となって取り組むための手だてとしてグルーピングを工夫した。初読後に提出させた疑問を分類し、共通した関心をもつ生徒どうしを組み合わせさせた班編成をした。自分と似通った疑問をもつ生徒どうしで話し合い、各自の疑問を追究していくグループ（以下、カテゴリーグループ）と、いつもの席が近い者どうしのグループ（以下、ホームグループ）とを往復しながら自他の考えを比較検討し、一人一人が作品理解を深めていくことを狙った。第三次の1時間は、前時までの協働学習の成果を振り返り、自分なりの考えを記述した。

言語活動は、〔思考力、判断力、表現力等〕C(2)イ、B(2)アを設定した。

○評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・文学作品を読んで、作品や表現の特徴に気づくことから、作品を読み深めようとしている。	・自分なりの関心をもとに、協働的学習活動をとおして作品の理解を深め、自分なりの考えをまとめて記述している。 C 読むこと	・文学作品を読んで、自分なりの関心から追究していきたい疑問を定めている。 ・班内での話し合いにおいて、すすんで自分の考えを伝え、相手の考えを聞いている。

○学習指導計画（全 5 時）

時数	学習活動	評価基準
1	○本文を音読で通読し、自分なりの関心から疑問を一つ決めて「……か。」で終わる一文でまとめる。	◇作品や表現の特徴に注目して疑問文を書いている。
2	○ホームグループで語句の意味調べをし、ワークシートに書く。 ○ホームグループ内で前時の疑問を交流し、再度前時の自分の疑問を検討して一文でまとめ直す。	◇班内で協力して辞書を引き、意味調べを行っている。 ◇意見共有をふまえて検討し、疑問文を書いている。
3	○カテゴリーグループ内で互いの疑問を聞き合い、気づいたことや思ったことをワークシートに書く。 ○カテゴリーグループで話し合われたことを、ホームグループに戻って報告する。報告を受け、改めて自分の疑問がどこまで解決に近づいたかを振り返り、ワークシートに書く。	◇自分の疑問をすすんで班内に伝え、相手の疑問を聞いて成果を書き留めている。 ◇報告をすすんで聞き合い、自分の考えを振り返って気づいたことを書き留めている。
4	○前時に続いてカテゴリーグループ内で互いの疑問を交流しながら、自分の疑問を検討して気づいたことや思ったことをワークシートに書く。 ○カテゴリーグループで話し合った内容を小ホワイトボードに書いて全体に向けて発表し、質疑応答を行う。	◇班内での検討の成果をふまえて、自分の疑問についての考えを書いている。 ◇自分のグループの議論内容をすすんで全体に発表し、聞き合っている。
5	○グループ活動での検討内容を振り返りながら、第 2 時まで立てた自分の疑問に対する解答となるように、自分なりの考えを記述する。	◇前時までの学習成果をふまえて、自分なりの結論をまとめて書いている。

○本時の展開（4 / 5 時）

【ねらい】

- ・カテゴリーグループ内でもち寄った各自の疑問を議論し、自分の疑問の解決に役立てる。
- ・カテゴリーグループでの活動の成果を教室全体で共有し、自分の疑問の解決に役立てる。

【カテゴリーグループの編成例と留意点】

集めたワークシートを点検し、疑問の内容から共通した問題意識が読み取れる生徒どうしを組み合わせたグループを編成する。あるクラスでは、A～F までの七つのグループ分けとなった。

A 前半の「若い女性」をめぐっての疑問…………… 9 人	} 物語の内容に即した具体性のある疑問のグループ
B 後半の「私」の二重性をめぐっての疑問…………… 7 人	
C データの重複をめぐっての疑問…………… 4 人	
D データと人間の関係性をめぐっての疑問…………… 5 人	— 抽象的なテーマ性をもったグループ
E 前半と後半のできごとの対比をめぐっての疑問… 5 人	} 作者の創作作法に着目したグループ
F 作者の創作意図をめぐっての疑問…………… 4 人	
G どのカテゴリーにも属さない疑問（＝その他）… 6 人	— どのグループにも入りにくい特色ある疑問のグループ

席を移動して実際に話し合いの活動を始めると、生徒たちはいつもとは違った活動の新鮮さから楽しそうに意見交換に励んでいた。一方、自分の疑問はこのグループでは生かされないという疑問をもつ生徒も数人出てきた。そこで、次時の活動に向けてグループのメンバーを一部変更したが、こうした「人事異動」も珍しかったようで前向きに受け止めて次時の活動を行っていた。

このカテゴリーグループでの活動意図が「班内での意見をすり合わせて合意形成を図ること」ではないことは、生徒たちに意識させておかなければならないことである。活動の目的はあくまで「自分の疑問の解決を図ること」であって、そのために議論を通じて他者の意見を役立てるといったのがグループ活動の意義である。授業時間の終盤で元の席に戻ってホームグループでの報告会を行ったり、ワークシートを使って自分の疑問がどこまで解決に近づいたかを記述させたりしたことは、本来の目的を忘れさせないための工夫の例である。

○本時の展開例

学習活動	指導の留意点	◇評価基準
<p>1 本時の流れ、目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・カテゴリーグループからの発表 ・自分の疑問の解決 </div> <p>2 全文を黙読する。</p> <p>3 カテゴリーグループからここまでの議論の内容をまとめて発表する。</p> <p>(1)カテゴリーグループの席に移動し、前時から話し合ってきた内容を確認して小ホワイトボードに整理して書く。</p> <p>(2)小ホワイトボードを全体に示しながら発表する。（3分×7グループ）</p> <p>○聞き手は聞き取ったことをワークシートにメモする。</p> <p>(3)聞き手から質問や意見を受け、質疑応答する。</p> <p>○全てのグループの発表が終わったら、元の席に戻る。</p> <p>4 自分が追究してきた疑問に対する自分なりの考えをワークシートに記述する。</p> <p>○教師に指名された生徒は、自分の記述内容を発表する。</p> <p>5 本時を振り返る。</p>	<p>○本単元全体の目標を再認識させる。</p> <p>○グループ活動や疑問の解決が、本文の記述をもとに行われることを意識させる。</p> <p>○見やすい文字で手際よくまとめられるよう、支援する。</p> <p>○発表が終わったらホワイトボードは黒板に掲示する。</p> <p>○発表内容や質疑のポイントや補足を整理して板書するなど、全体の理解を助ける。</p> <p>○机間巡視し、全体の参考になりそうなもの、ユニークな内容のものに目をつけておいて、数人に発表させる。</p> <p>○発表を聞いて、新たに気づいたことがあれば追加してメモするよう促す。</p>	<p>◇すすんで自分の考えを伝え、相手の意見を聞き取っている。</p> <p>◇班活動の成果を見やすい体裁でホワイトボードに書いている。</p> <p>◇ボードの記述に即してわかりやすく発表している。</p> <p>◇発表内容を聞き取り、メモに書き留めている。</p> <p>◇発表内容に対して本文の記述に基づきながら質問や意見を述べている。</p> <p>◇グループ発表の内容や本文の記述に基づきながら、自分の疑問に対して自分なりの考えを書いている。</p> <p>◇指名された発表を聞き取って、気づいたことをメモに書き留めている。</p>

○授業の成果と課題

本学習単元の要旨は、「学習者が自ら立てた問いを、なるべく教師の補助を控えた形での生徒どうしの討議によって追究し、個的な読者としての答え＝解釈に至ること。その困難を一連の学習活動を通じて経験することで、文学を読むことの面白さを実感すること」であった。そのことの実現を目ざした指導の工夫の一端は、筆者が「カテゴリーグループ」と呼んだ流動的なグルーピングにある。このグルーピングは、学習者の関心のありかによって結びつけられたという必然性の下で行われたのであり、学習者の主体的な学びを促す一つの方法でもあった。こうした協働的な学習方法の必然性は、現代小説『私』という、一読しただけでは内容理解が判然としない文学作品を教材として取り上げたことと結びついていた。

単元の終わりに授業を振り返ったまとめの感想として提出された生徒の声は、さまざまであった。まず、授業手法や学習過程をめぐっての感想を肯定的に述べた例。

○まずは全く違う疑問をもつホームグループの班のメンバーで話し合うことで、他の人の疑問を聞いて、新鮮な感じだった。その次に、同じような疑問をそれぞれもっているカテゴリーグループで話し合い、自分の立てた疑問が少しずつ解決されていくのを感じて学びが深まった。また、話し合うだけでは終わらずに、自分の疑問を何らかの結論に導くことで、話し合ったことを言葉にする力が高まった。

○グループに分かれて同じニュアンスの疑問をもつ人との話し合いはおもしろいと思った。同じニュアンスの疑問でも、一人一人考えが違っていたからだ。最終的に私のあげた疑問はよくわからないままだったが、自分なりの考えが少し見えてきたので、よい活動だったと思う。

一方で、教師の補助が少ない困難を実感しながらの取り組みであったことを振り返る声。

○同じ疑問をもった者どうしで集まり、回数を重ねて話し合うことで、自分が立てた疑問に最後までしっかりと向き合うことができたのでよかった。しかし、やはり一から考えていくのは難しく、一人一人から出る考えに限度があったので、他の班から助言をもらったりしてもよいなと思った。

最後に、『私』という作品の内容上の特性に言及して、今回の学習の意義を語っている声。

○この作品は、「私」という存在とデータとの結びつき、関係性をめぐった作品で、存在とデータの関わり方、どのように向き合っていくかをよく考えさせられた。また、考えていくうちに考え方も変わっていき、みんなと話し合っていくうちに考えが広がったり解決したり新しい疑問が出てきたりなどととても楽しかった。

こうした学習者の意見感想を総括すれば、学習者の個としての主体性を保障しながら、協働的に作品世界を追究していったことに一定の成果があったと評価できる。必ずしも「つまびらかにわかる」地点に着地しない授業手法であっても、仲間と苦勞しながら作品世界に分け入っていく学習は、学習者がその過程を楽しんで取り組むという意味で意義がある。さらにこうした手法は、ことに抽象的なテーマを扱って一読して理解が判然としない文学教材においては、有効性のあることも確かめられた。一方で、予め用意した問いを投げかけることに始まって教師が学習者の理解を導いていくような通常の授業形態と比べ、教師の援助が乏しい手法であることも事実である。グループの活動ぶりを注意深く巡視して助言したり、学習者が提出したワークシートの記述を丁寧に点検したりと、支援のあり方には留意したが、学習者の文章理解を一定程度保障していくことには課題が残った。今回は、グルーピングの工夫によってその課題を解消すべく試みたのだが、さらに実践を重ね検討を続けていきたい。